

異界のホスピタリティ

橋 弘 文

1 はじめに

ツーリズム tourism が誕生した 19 世紀のはるか以前、紀元前 3000 年ころにメソポタミアで成立したとされる『ギルガメシュ叙事詩』¹⁾には、主人公ウルクの王ギルガメシュの旅行が重要なテーマとして語られている。

ギルガメシュは二つの大旅行をおこなう。一つは、親友のエンキドゥとともにおこなった香柏の森への旅行。ギルガメシュとエンキドゥは、香柏の森の主である怪物フンババを退治するために遠方にある香柏の森へ旅行した。二つ目の旅行は、聖王ウトナピシュティムを訪ねる旅行である。ギルガメシュはエンキドゥの死をきっかけにして、死を恐れ、不死の秘法を知るとされるウトナピシュティムに面会し、その秘法を獲得するために「マーシュの山々」を越え、「死の水」を渡り、苦難にみちた大旅行をおこなった。

ギルガメシュが、怪物フンババが住む香柏の森へ旅行したり、旅行の途中で、マーシュの山に住むサソリ人間に出会ったりするという展開は、文字で書かれた、おそらく最古のこの物語に、旅行と異界の関係が示されているという点で興味深いものがある。

エリック・リードは、『ギルガメシュ叙事詩』に語られる旅行を、ヴァン・ジェネップの『通過儀礼』を軸にして読みなおし、旅行の精神史を構築している²⁾。

1909 年にフランス語で出版されたジェネップの『通過儀礼』には、「LES RITES DE PASSAGE, ÉTUDE SYSTÉMATIQUE DES RITES DE LA PORTE ET DU SEUIL, DE L'HOSPITALITÉ, DE L'ACCOUCHEMENT, DE LA NAISSANCE, DE L'ENFANCE, DE LA PUBERTE, DE L'INITIATION, DE L'ORDINATION, DU COURONNEMENT, DES FIANSAILLES ET DU MARIAGE, DES FUNERAILLES, DES SAISONS, ETC (通過儀礼、門扉としきい、歓待、養子縁組、妊婦と出産、誕生、幼年期、思春期、イニシエーション、叙任式、戴冠式、婚約と結婚、葬送、季節などの諸儀式の体系的な研究)」という長い書名がつけられている³⁾。

書名の中に、「LA PORTE ET DU SEUIL, DE L'HOSPITALITÉ (門扉としきい、歓待)」とあげられているように、ジェネップは、旅行における人間の経験、とくに、人間が異文化の地域に旅行したときの体験の構造を、それぞれの文化が人の一生を分節している諸儀礼の分析に応

用した。

文化人類学や民俗学では、エドモンド・リーチの聖俗理論⁴⁾やヴィクター・ターナーの境界理論⁵⁾などへの展開がみられるものの、ジェネップの『通過儀礼』をおもに人の一生の諸儀礼の基礎的研究として受容してきた。これに対してエリック・リードは、ジェネップがヒントを得た、旅行と異文化体験の構造と意味に注目している。

この稿は、主として日本の昔話や伝説を題材にして、すでに『ギルガメシュ叙事詩』で暗示されている異界への旅行について、ホスピタリティの観点から考察することを目的にしている。

2 異界のホスト

異界とは何だろう。神話、伝説、昔話などは、しばしば、登場人物が生活する現実とは異なる世界＝異界を想定して語る。異界はいっぼうで空間的にとらえられる。天上、地下、海上、高山などさまざまな場所に異界の空間が想像される。たほう異界は時間的にもとらえられている。死後および生前の世界の实在が、「この世」とは異なる「あの世」として想像されてきた。

空間上の異界は現実世界と境界を接しており、ひんばんではないけれども、異界と現実世界は交流すると想像される。また、人間が死後に赴くとされる「あの世」に、いったんは行ったが、何らかの理由で再びこの世に帰ってきた、という異界との往還も想像されている⁶⁾。

空間的な境界の外に想像される異界、時間的な境界の外に想像される異界、そのどちらにも、そこに住む存在が想像される。神話、伝説、昔話などにおいて、それらの存在は、神であったり、鬼のような怪物であったり、動物であったり、いずれにせよ、ふつうの人間ではない。そうした異界の存在がホスト (host) として、この世の人間の訪問者を客 (guest) としてむかえることがある。

昔話「鼠の浄土」では、穴に落ちたおむすびを探しにやってきたおじいさんをむかえるのは、鼠の集団だった。『古事記』に語られる、いわゆる「山幸彦と海幸彦」の物語では、海神とその集団が、山幸彦の火遠命を遠来の客としてむかえて、もてなしている。御伽草子「酒呑童子」では、酒呑童子をリーダーとする鬼の集団が、頼光ら一行をむかえている。

しかし、異界の存在が、いつもかならず、異界に来た人間を客としてむかえるとはかぎらない。異界の存在は、異界に来た人間をもてなすこともあれば、場合によっては、敵として排除しようとすることもある。異界の存在が、異界に来た人間をもてなすか、それとも、排除するか、言い換えれば、異界において、異界の存在と人間のあいだにホスピタリティが成立する

か、それとも、異界の存在が異界にきた人間をホステイラティ *hostility* (敵対) の対象にするか、という態度の決定は、ホストである異界の存在とゲストである人間との関係のあり方によって左右される。

文化人類学者のジュリアン＝ピット・リバーズは、①もしホストがゲストの名誉を汚すような行動をするとき、②もしホストがゲストの安全を守らないとき、③もしホストがゲストの満足のゆく世話をしないとき、ホスピタリティは、どの文化においても成立しないだろうと論じている⁷⁾。ピット・リバーズが析出した「ホスピタリティの法 (*Low of hospitality*)」は、異界のホスピタリティにも適用されると考えられる。ホストとゲストの関係から構成されるホスピタリティの成立は、ゲストの態度とも関連する。つぎに異界のゲストについてみてゆこう。

3 異界のゲスト

神話、伝説、昔話などにおいて、異界へ旅行した人間は、いったい、どのような理由から、異界を訪れたのだろうか。旅行者の意志を基準にすれば、おおよそ、異界旅行はそのいきさつに応じて、以下の三つに分類できる。

A [計画的な異界旅行]: 旅行者本人が異界への旅行を意図して、異界を訪れる。

B [偶然の異界旅行]: ある人間が、偶然に異界を訪れることになる。

C [強制的な異界旅行]: ある人間が、異界の存在によって、むりやり、異界に連れて来られる。

これら A、B、C、の型の異界旅行のうち、C 型の [強制的な異界旅行] では、異界の存在と人間との結婚というかたちがみられる。たとえば、昔話「鬼の子小綱」では、人間の女性が鬼の世界へ連れて行かれ、そこで鬼と結婚し、鬼とのあいだに子どもをもうけている。また、御伽草子「貴船の本地」に登場する鬼の妻も鬼の世界に連れて来られた人間だった。さらに御伽草子「酒呑童子」には、酒呑童子という鬼に誘拐された都の女性たちの姿が語られる。彼女たちは酒呑童子の館のなかで働かされている。C 型の [強制的な異界旅行] の人間は、異界の存在の家族になるか、従者にされており、どうやら、むりやりに異界に旅行することになった人間は、異界の存在にゲスト (客) としては、むかえられてはいないようである。

A 型の [計画的な異界旅行] の例として昔話「桃太郎」の鬼ヶ島旅行があげられる。しかし、桃太郎は鬼ヶ島の鬼たちからホスピタリティを受けていない。それは桃太郎が鬼を攻撃 (退治) し、鬼の富を奪おうとするからだ。このようにゲストがホストを攻撃するような場合、当然、ホスピタリティは成立しない。ピット・リバーズは、ゲストの態度とホスピタリティの関係について、次のように論じる。①もしゲストがホストを侮辱するとき、②もしゲスト

がホストの役割をうばうとき、③もしゲストがホストによって提供されるものを拒絶するとき、ゲストは「ホスピタリティの法」を破ることになる⁸⁾。

昔話「舌切り雀」で、爺が雀の世界へ行き、おみやげに財宝をもらって来たことをまねた婆が、財宝目当てで雀の世界へ行っている。爺が雀の世界へ行ったのは、偶然であり、これは B 型の「偶然の異界旅行」に相当する。婆の場合は、最初から目的地が雀の世界と決められており、この婆の旅行は、A 型の「計画的な異界旅行」といえる。しかしながら、婆は、爺と同じようなホスピタリティを雀たちから受けることはなく、最後には化け物が詰まったつづらをプレゼントされている。昔話「鼠の浄土」の隣の爺も同じような目にあっている。

『古事記』に記されるイザナギの黄泉国訪問も、A 型の「計画的な異界旅行」といえるが、イザナギは黄泉国で明かりをつけるという自らの行為のために、黄泉国でホスピタリティを受けることなく、逃走することになった。

昔話「天人女房」では、主人公の男性は夫人の妻をもとめて天上世界へ登ってゆくが、天上世界で彼を待っていたのは、ホスピタリティではなく、天上世界で生活するための「試練」だった。A 型の「計画的な異界旅行」は、異界におけるホスピタリティに結びつかないように思われる。

異界へ旅行した人間が、異界でホスピタリティを受けるのは、B 型の「偶然の異界旅行」の場合に限られるように思われる。

たとえば、「諏訪の本地」における甲賀三郎の地下世界旅行。甲賀三郎が地下世界へ旅行するきっかけは、兄たちの策略で深い穴底に置き去られたことによる。また、火遠命が海神宮へ行くことになったきっかけも、かれが偶然に兄に借りた釣り針をなくして、海辺で茫然としているところに、塩土翁が現れたことによる。浦島太郎も最初から竜宮へ行こうと計画していたわけではなかった。偶然に異界へ旅行した人間だけがホスピタリティを受けるということは、逆にいえば、異界が選んだ人間のみを異界の存在はホスピタリティの対象にしているように思われる。異界にゲストとして選ばれた人間が、ときには、異界と人間の世界を媒介する者に案内されて、異界へ行き、そこで異界の存在からホスピタリティを受けたといえる。

4 異界におけるホスピタリティ

神話、伝説、昔話などで、異界へ旅行した人間は、異界においてどのようなホスピタリティを受けているのだろうか。おおよそ異界のホスピタリティは、人間世界におけるそれと基本的には変わらない。食事、宿泊の提供、そして場合によっては性の提供もありえる。昔話「鼠の浄土」の爺は鼠の世界でごちそうを提供される。

昔話「浦島太郎」では、主人公の男性は竜宮でごちそうになったうえ、そこに数日滞在している。そして人間の世界にもどったとき、人間の世界では数百年の時間が経過していた。異界での宿泊は、異界の時間と人間の世界の時間の流れ方のちがいを引き起こすことになる。

三浦佑之氏は、「浦島太郎」は、もともとは男性の性的快楽を表した伝承だったと論じている⁹⁾。それにしたがうならば、浦島太郎も竜宮で性的なもてなしを受けたと想像されていた場合もありうる。また「狐の草紙」では、ある僧都が美女の館に招かれ、性的関係をむすぶ。この美女は狐が変身したものであり、その立派な館も狐の呪術による幻影だった。ただし、この僧都は、その幻影が打ち破られるまで、美女の館が狐の世界であるとは気づいていない。

異界に旅行した人間が、異界の存在と結婚するという伝承もみられる。火遠命は海神宮に滞在し、海神の娘と結婚する。昔話研究は、このような人間と人間以外の存在の結婚をテーマとした話を「異類婚姻譚」と呼んでいる。

異類婚姻譚は、まず二つの型に分けられる。一つは人間の男性と異類の女性の結婚であり、もう一つは人間の女性と異類の男性の結婚である。この二つの型の話は、さらに結婚生活の空間が人間世界か、それとも異界かによって、それぞれ二つに分けられる。異界のホスピタリティにかかわってくるのは、人間の男性が異類の女性と異界で結婚するという話と、人間の女性が異類と異界で結婚するという話である。前にのべたように、人間の女性が異界の存在と異界で結婚生活をおくる話では、人間の女性がたまたま異界へ旅行して異界の存在と結婚するという展開でなく、最初から結婚を目的に異界に行く、もしくはむりやり連れ去られるという話が多い。したがって、異界で結婚する男性はホスピタリティを受けるが、異界で結婚する女性がホスピタリティを受けるという話はあまりみられない。

異界におけるホスピタリティを特色づけるものとして、異界のおみやげがある。火遠命は海神から塩干珠と塩盈珠という不思議な珠をおみやげにもらい、それを使って兄を征服する。昔話「鼠の浄土」の爺や「舌切り雀」の爺は、おみやげに多くの財宝をもらう。異界のおみやげは人間の世界に大きな力を及ぼす。それゆえ、異界のもたらす富を熱望した人びとは、異界に到達するはずのルートを探した。

5 異界へのルート

異界は、天上、地下、海上などさまざまな場所に想像されており、それらの異界へのルートもさまざまになる。異界へ旅行した人間の多くは、異界の存在の案内や助言によって、異界へのルートをたどり、そこに到着している。

たとえば、「天人女房」では、天上の異界に届くような蔓をもつ瓜の育て方が助言者によっ

て教えられている。よく知られているように浦島太郎は亀の案内で竜宮に至る。こうした案内者や助言者の存在は、逆にいえば、人間は案内者や助言者なしには異界に到達できないということを示している。

とはいえ、昔話「鼠の浄土」や「舌切り雀」では、異界の財宝を得たいと思う隣の爺や婆たちは、鼠や雀の世界に到着しているのではないか。しかし、彼らは望み通りに異界のおみやげを獲得することはできなかった。それどころか、あるヴァリエントでは「鼠の浄土」の隣の爺は土に埋もれて死んでしまう。また、「舌切り雀」の婆は、みやげのつづらから飛び出てきた化け物に殺されてしまう。2度目の異界旅行の失敗は、人間は、異界の存在の案内や助言なしには、異界旅行を成功することはできず、人間は異界へのルートを確認しがたいということを表していると思われる。

『古事記』のイザナギが黄泉国を訪問する話では、イザナギが黄泉国の住人となったイザナミから逃走し、最終的にはイザナギは黄泉国に通じる道を巨大な岩でふさぐことによって、イザナミの追撃をかわした。イザナギの黄泉国訪問は、結果として黄泉国（異界）との回路の断絶を招いてしまった。

イザナギの黄泉国訪問譚にみえる異界とのルートの断絶は、世界のさまざまな神話にみられる一つのテーマに共通する。かつて人間は異界との交流が可能だったが、ある出来事を契機にして異界とのルートが遮断されてしまったというテーマが神話にはしばしば語られる。昔話にみられる異界へのルートの不確定さや神話における異界へのルートの喪失は、異界をふくむ世界観の形成とかかわっていると思われる。

昔話や神話というジャンルは、基本的には特定の場所を限定して異界へのルートを語ることはまれであるが、伝説というジャンルでは異界へのルートが、現実のどこかの場所に探し求められる。

柳田国男氏の『遠野物語』によれば、岩手県遠野地方にはマヨイガとよばれる山中の不思議な家の存在が伝承されていた。マヨイガに行き着いた者は、その家にあるモノをどれでも持ち帰ってよく、それによって長者になることができるといわれていた。『遠野物語』六四は、マヨイガとそこに至るルートについてつぎのように記している¹⁰⁾。

カネサハムラ シロミ フモト
金沢村は白望の麓、上閉伊郡の内にも殊に山奥にて、人の往来する者少なし。六、七年前
此村より栃内村の山崎なる某か、^{ナニガシ}が家に娘の髻を取りたり。此髻実家に行かんとして山路に迷
ひ、又このマヨイガに行き当たりぬ。家の有様、^{アリサマ}牛馬鶏の多きこと、花の紅白に咲きたりしこ
となど、すべて前の話の通りなり。同じく玄関に入りしに、膳椀を取り出したる室あり。座敷
に鉄瓶の湯たぎりて、今まさに茶を煮んとする所のやうに見え、どこか便所などのあたりに人

が立ちて在るやうにも思はれたり。茫然として後には段々恐ろしくなり、引き返して終に小国の村里に出でたり。小国にては此話を聞いて実とする者もなかりしが、山崎の方にてはそれはマヨイガなるべし、行きて膳枕の類を持ち来たり長者にならんとて、聳殿を先に立て、人あまた之を求めに山の奥に入り、ここに門ありきという処に来たれども、眼にかゝるものも無く空しく帰り来たりぬ。その聳も終に金持になりたりと云ふことを聞かず。

栃内村の山崎の人びとは、マヨイガに行って帰ってきたと思われる男に案内させて、白望山にあるかもしれないマヨイガを見つけようとした。そして、ここでも異界であるマヨイガへのルートは断絶されている。しかしながら、興味深いことに、異界や異界へのルートが伝説というジャンルで伝承されるときには、異界や異界へのルートは、現実どこかに存在する場所として想像されてきた。伝説を信じない人びと、たとえば、『遠野物語』六四話における小国の人びとにとっては、異界へのルートなど存在するはずがなかった。しかし、伝説を信じる人びとにとっては、異界へのルートはどこかにきっと存在しているはずだった。

ただし、伝説の伝承空間は必ずしも大きくはない。同じ遠野でも伝説が伝承されている地域とそうでない地域がみられる。もし、異界へ旅行した人間の旅行記が出版されたなら、それは伝説よりもっと広い範囲の人びとに異界へのルートの存在を印象づけたにちがいない。たとえば、15世紀初期に刊行された、アンドレア・ダ・バルベリーノの『いやしいグエリーノ *Guerino Meschino*』は、イタリアのアペニン山脈の一面にあると伝えられる異界への訪問譚であるが、この本の刊行は、その異界の周辺地域だけでなく、遠方の人びとにも、その異界への興味をかきたてた。

6 異界旅行記

アンドレア・ダ・バルベリーノの『いやしいグエリーノ』のストーリーを、孫引きで恐縮だが、マリーナ・ウォーナーの『野獣から美女へ おとぎ話の語り手の文化史』¹¹⁾によって紹介しよう。

グエリーノが親をたずねる旅行の途中、ウンブリア地方のノルチアの近くの山道で、ぱったり悪魔に出会う。悪魔は、その近くの地底にシビツラが住む世界があり、そこへ行けばあらゆる快樂を味わうことができるとグエリーノをさそう。グエリーノは、あっさり悪魔のさそいのり、シビツラの世界の入り口になる洞窟に至る。洞窟の入り口にいたヘビが「行くな」とグエリーノを制する。そのヘビはシビツラによって変身させられた人間だった。グエリーノは、そのヘビを踏みつぶして洞窟の中をどんどん進み、シビツラの住む世界に到着する。

シビッラは、いかなる男性をも惑わす、なまめかしい魅力にあふれていた。シビッラは甘いことばとゆきとどいた心遣いでグエリーノを歓待した。シビッラの住む世界では、木々に花が咲くのと同時に実になる。苦しみも悲しみも老いもない。グエリーノは、ごちそうを好きなだけ食べ、お気に入りの流行の服を着て、好きな音楽に耳を傾けて過ごす。

シビッラはグエリーノに性的関係を迫るが、なんとなくグエリーノはその誘惑を断る。土曜日にグエリーノは、シビッラのスカートの下が恐ろしい怪物の姿になっていることに気づく。グエリーノはシビッラに別れを告げる。シビッラは、ローマ建国の英雄、アエネアスでさえ、もっと親切だったのに、と嘆くが、グエリーノはシビッラの世界を去り、もとの世界にもどるとローマに行き、シビッラとすごした1年のあやまちの赦しを得る。

14世紀から15世紀にかけて、このアペニン山脈にあるというシビッラの世界はヨーロッパ中で評判になっていた。多くの作家たちが、アペニンのシビッラについて書いていた。ジュゼッペ・サンタレリによれば、シビッラにたいするイメージは、大きく二つに分かれるという¹²⁾。一つは、アペニンのシビッラは、ナポリ近郊のクマエの洞窟から移動してきた、威厳のある美しい予言者であるというイメージである。もう一つのイメージは、悪魔と手をむすび、男たちを招き入れ、快楽をあたえる魅惑の呪術者というシビッラのイメージである。イタリア人の作家たちは賢明な予言者のシビッラのイメージを作りあげ、ドイツやフランスの作家たちは男たちを誘惑する魔法使いのシビッラのイメージを生み出していった。いずれのシビッラもキリスト教にとって異教の存在であり、彼女の住まいは山の洞窟の彼方にあると想像されている。

1420年5月に、シチリア王アンジュー伯爵ルイ3世の息子ジョバンニ・カラブリアの家庭教師をしていたアントワーヌ・ド・サールは、このアペニン山脈のシビッラ伝説の調査旅行に出発した。後にその調査旅行記が『女王シビルの天国 (Le Paradis de la Reine Sibylle)』としてまとめられる。ド・サールの旅行記によれば、多くの巡礼者たちが、シビッラに教えを求めためや、呪いの本をシビッラに献上するために、シビッラの洞窟を訪ねようとしていたという。シビッラの洞窟に行くには、地元の村と領主の許可が必要だった。というのは、地元の村では、異教の魔術師がシビッラの洞窟に行くと、嵐が起り、収穫前の作物に被害を与えると信じられていたからである。じっさい、許可を得ずに洞窟に行こうとした8人の男たちが村人に捕まえられ、村人によって八つ裂きにされ、山の湖にそれらの死体が投げ込まれたという¹³⁾。

ド・サールは、地元のモンテモナコの若者たちの案内で洞窟のある高度2175メートルの山上まで登って行った。ド・サールは洞窟の中に入っていかなかったが、彼を案内してくれたモンテモナコの5人の若者たちが、長いロープ、トーチ、火石、そして5日分の食料を装備し

て、その洞窟を降りて行った。ド・サールは、洞窟の中から戻ってきた若者たちから、洞窟の中の様子を聞いて記録した。洞窟を3マイルほど降下すると、広いコリドールがある。一步一步恐怖に震えて進んでゆくと、突然、猛烈な暴風が洞穴に開いた裂け目から吹き上げてきた。5人の若者たちは、さらに先に行こうとはしなかった。かれらは、その旋風によって小枝のように飛ばされる危機に瀕していたからだ。風のうなり音は、かれらの耳を聞こえなくした。その嵐のような突風は、かれらを撃退し、凍らせた。かれらは何もかも捨てて、心臓が口から出てきそうなほど怯えて、引き返した。

洞窟のその先はどうなっているのか。ド・サールは、若者たちよりも洞窟の先に進んだというモンテモナコの司祭であるアントニオ・フマートから話を聞いた。アントニオ・フマートは、2人のドイツ人をともなって、その洞窟に入ると、やはり暴風にみまわれた。その暴風の中を15テセ tese (1テセは1.949メートルに相当する) 進むと、風は止んだ。3テセ以上先に降りた後、不思議な物質でできた橋がある。その橋はたいへん長く、一步の幅よりも狭い。その橋の下には、底なしの深淵が口を開いていた。ごうごうと音を立てる川が下を流れ、岩柱の突然の滑落が、揺れるような振動をもたらした。しかし、ここで不思議なことが起きる。最初の一步を橋に踏み出すと、橋の幅が広くなり、深い穴は小さくなり、川の轟音はしだいに消えてゆく。そして反対側で洞窟は一つの台地につながる。その台地は、広くて明るい道で横断される、幻影のトンネルに似ている。この最後に2匹の龍がいる。1匹の龍は、別の龍の前にいる。それらの龍は、輝く物質で彫像されており、マジカルな形で生命を与えられているが、至高の荘厳さを保ってじっとしている。それらの龍の目は、明るく光る灯台になり、まわりのすべてを照らしている。

その2匹の龍の向こうに、狭いコリドールが開いている。およそ100歩の長さで、その先に四角い空間がある。そこに二つの金属の扉があった。ドイツ人たちは二つの扉を激しく打ち壊して、その先に進んで行ったが、アントニオ・フマートは先に進まずそこにとどまった。アントニオ・フマートは、先に進んで行ったドイツ人たちを長い間、待っていたが、かれらは帰って来なかった。なお、このアントニオ・フマートはちょっとした幻覚に陥りやすかったと、ド・サールは記している¹⁴⁾。

結局、ド・サールはみずから洞窟の中に入り、シビッラに出会うことはなかったし、洞窟の中を進んでシビッラの住む場所に辿り着き、シビッラのホスピタリティを受けたという人に会って話を聞くこともできなかった。ド・サールの『女王シビルの天国』は、シビッラの世界の入り口とされる洞窟の一部のようすと、その洞窟の近くの住人たちの興味深い行動を伝えているが、シビッラの世界の探訪記録ではなかった。その洞窟の先に、はたしてどのような世界がひろがっていたのか、ド・サールは知ることができなかったし、あえて空想をめぐらしてシビ

ッラの世界を描くことをしなかった。

それでもシビッラの世界は存在すると信じて、その洞窟を訪ねる人びとが跡を絶たなかったという。1497年にローマ教皇庁は、シビッラの洞窟へ行く巡礼者を異端として破門にすると宣言したが、シビッラの世界は人びとをひきつけつづけた。ある説によれば、シビッラの洞窟は、1898年にダイナマイトで爆破されてしまったという。

異界への旅行は、伝説や旅行記というジャンルを媒介にして、現実味を帯びるようになる。異界の存在を信じた人びとは、そこへ行けば、異界の存在がホストとして、ゲストである自分たちを親切にもてなしてくれ、うまくゆけば、貴重なおみやげをもらえるだろうと想像した。

このような異界のホスピタリティにたいする幻想は、現代のツーリズムにおけるホスピタリティとどのように関連しているのだろうか。次の課題としたい。

注

- 1) 月本昭男訳『ギルガメシュ叙事詩』岩波書店 1996。
- 2) エリック・リード（伊藤誓訳）『旅の思想史：ギルガメシュ叙事詩から世界観光旅行へ』法政大学出版局 1993。
- 3) A. V. ジェネップ（秋山さと子・彌永信美訳）『通過儀礼（新装版）』新思索社 1999。
- 4) エドモンド・リーチ（青木保・井上兼行訳）『人類学再考』思索社 1985。
- 5) ヴィクター・ターナー（富倉光雄訳）『儀礼の過程』思索社 1976。
- 6) 異界の定義については、小松和彦氏の定義を参照（小松和彦編『日本人の異界観』せりか書房 2006）。
- 7) Julian Pitt-Rivers, *The fate of Shechem or the politics of sex*, Cambridge University Press, 1977.
- 8) Julian Pitt-Rivers、前掲書。
- 9) 三浦佑之『浦島太郎の文学史』五柳叢書 1989。
- 10) 『柳田国男全集 第2巻』筑摩書房 1997。
- 11) マリーナ・ウォーナー（安達まみ訳）『野獣から美女へ おとぎ話の語り手の文化史』河出書房新社 2004。
- 12) Giuseppe Santarelli, Translated by Phoebe Leed and Nathan Neel, *LEGENDS OF THE SIBILLINE MOUNTAINS*, USA, 2006.
- 13) マリーナ・ウォーナー、前掲書。
- 14) Giuseppe Santarelli、前掲書。